

に合わせたケアを生み出していた。さらには、地域住民の「その人らしさ」を支援する仕組みづくりについても参加者より意見があり、領域を越えてのディスカッションを行うことができた。

ワークショップ4：

医療ニーズの高い療養児・者の在宅療養支援におけるイノベーション

【コーディネーター】

大黒 美渚（高知市健康福祉部 47期生 修士17期生）

森下 幸子（高知県立大学看護学部 修士6期生）

【企画の意図】

医療ニーズをもつ療養児・者の在宅療養の増加に伴い、法整備と支援体制の構築が図られている。在宅療養児・者と家族の安全・安心な療養を支援するために在宅看護の専門性の枠を超え、地域や多職種を巻き込むイノベーションに取り組む看護実践を理解し検討する。

【話題提供者の紹介及び話題提供の内容の概要】

一般社団法人高知在宅ケア支援センター統括管理者、在宅看護専門看護師の安岡しずか氏より、医療ケア等が必要な子どもと家族のニーズを踏まえ、在宅レスパイト、保育所・学校訪問、相談支援など訪問看護制度の枠を超えて取り組む実践について話題提供をいただいた。続いて、公益社団法人兵庫県看護協会 神戸訪問看護ステーション管理者、在宅看護専門看護師の二宮園美氏より、医療ニーズの高い在宅療養者を24時間支援する課題や看護師の役割、介護職員等の喀痰吸引に関わる研修を通して在宅療養を支える人々のケアの質向上に取り組む連携と協働の実践について話題提供をいただいた。大黒美渚コーディネーターからは、「医療ケア児及びその家族に対する支援に関する法律」の概要と高知市の取り組みについて情報提供を行った。

【ディスカッション内容】

参加人数は14名で、行政、在宅、医療機関、学生や教員など様々な職場や領域からご参加いただいた。松下博宜先生の「イノベーションは肩を抜いた雑談から、偶発的な創造を大事に」を引用し、ディスカッションは全員のご意見や質問を伺い共有した。訪問看護師の負担にどう対処するか、家族への支援はどうか、保健師に期待することは何か、制度の活用は拡大しているかなどの質問にコメントを頂いた。ご意見からは、医療機関と地域の連携が重要、日常の課題のなかにイノベーションの種がある、医療ケア児等の支援・介護職との連携など制度や役割など枠を超えた取り組みを理解し、今の業務に生かしたいといった声が聞かれた。社会の変化を捉え、制度を活用し、実践を深化させていく地域包括ケアシステムのなかの看護のイノベーションの実践と更なる可能性を共有することができた。

ワークショップ5：

将来を見据えた卒業生のキャリアデザイナー—自分イノベーション—

【コーディネーター】

中井 美喜子（高知県立大学 修士14期生）

田之頭 恵里（高知県立大学 修士15期生）

【企画の意図】

卒業生のみなさんからこれまでの歩みを振り返り、今考えていること、将来を見据えて描くキャリアデザインについてお話しいただき、看護職の多様なあり方について参加者の皆さんとともに考えたい。

【話題提供者の紹介及び話題提供の内容の概要】

高知県健康政策部健康対策課 高橋咲季氏からは、地域社会や現場の課題解決に向けて地域の人々と取り組んでいることについて、松江市立皆美が丘女子高等学校 栗栖やすか氏からは、子どもの自由な発想に刺激を受けながら、子どもたちの健やかな成長と学びを支える養護教諭としての自己革新に取り組んでいること、高知県立大学看護学研究科博士前期課程 町田友里氏か

らは、大学院での学びを通して、臨床の中で得た課題を見つめ、新たな自分を創造していくことについて、JICA海外協力隊 下村幸氏からは、看護学部での学びを多様な価値観が存在する海外の文化の中で活かし、看護のあり方を見つめ直しながら実践していることについてお話しいただいた。

【ディスカッション内容】

話題提供者から参加者へ、日々の生活のなかで様々な価値観をもつ人とのかかわりを大切にしてほしい、結果よりプロセスを大事にしてほしい、目指している目標は変わることもあるた

め、興味のあることにはぜひチャレンジをとったメッセージが送られた。

参加者からは、「イノベーションは日々のケアの継続から生まれだすことだと改めて感じた」、「先輩の取り組みをうかがい実践のヒントになった」、「仲間づくりと雑談を大切にしていきたい」、「卒業後はいろんな道があることを知り、なにがしたいのか考え、行動することが大事だとわかった」、「将来に役立つことを聞くことができとても良かった」といった感想があり、それぞれが自分の将来を見据えたキャリアデザインについて考える機会になった。